

ギャラリー 2 展示 私の埴輪

平成19年12月1日～平成20年1月31日 馬場咲夫の埴輪作品展。

たまたま中近東文化センターで、古代エジプトのカバ神と出会い、
日本の埴輪で作れればと思いつきました。
もともと動物好きですので、作る面白さに一時はカバが頭に住み着き困りました。
埴輪には、限りない優しさが感じられます。穏やかな古代人の死生観が偲べれます。



すっきりと立つさくら



とろんとしたうめ



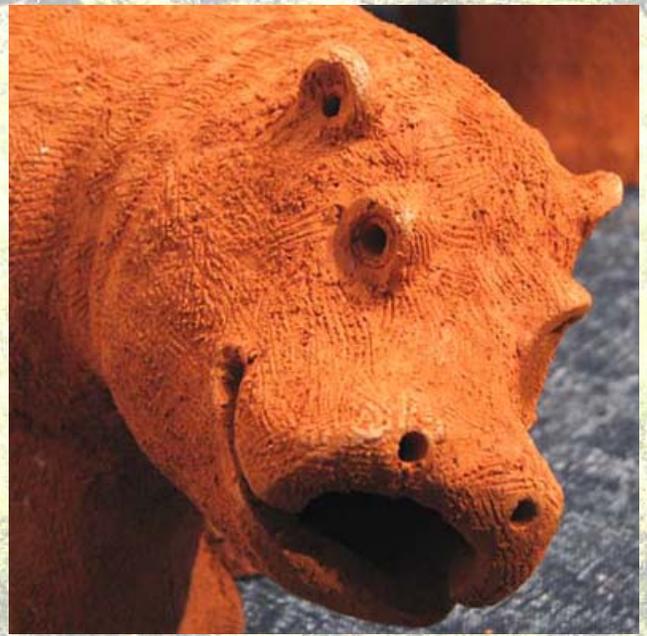
古代エジプトの墓からカバ神がでる
体重3ト40km/hで走り50kgの草を食べる。



子どもたちは、恐竜が大好き、私も大好き。



古代の王も象を持っていたら
埴輪に見せびらかしたろう。



おい、おまえもカバにならないかい。



歴代の犬たち。



天を突くたてがみの馬、さしずめ自家用ジェット機か。



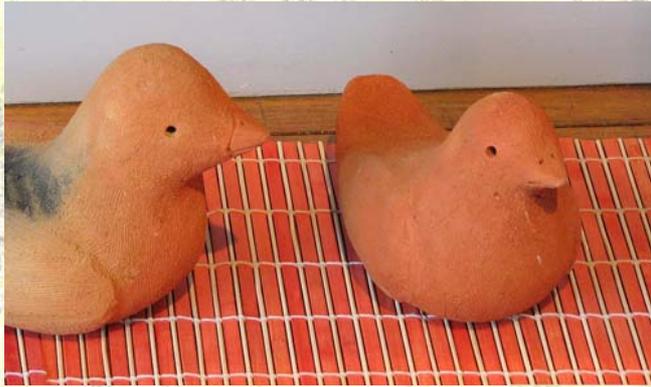
散歩の途中、深大寺の池でいつも会う
弱った鯉をねらっている。



魚は多産の象徴なのに、なぜか埴輪にならなかった。



雌鶏の気の強いこと強いこと子育て中は怖い物なし。



窓を開けると鳩の巣があり驚いた。



古墳の守り神にピッタリ。



仲良しの2匹

京 　　むさしの 14 版 2007年(平成19年)11月10日 土曜日 享貞

象・カバ・恐竜… 埴輪の輪

古墳の上や周りに並べて飾った動物の埴輪を再現した作品展を、調布市深大寺北町1丁目の陶芸家馬場咲夫さん(56)が15～20日、国立市のギャラリーで開く。古代人の暮らしとともにあった馬や牛などの家畜だけでなく、実際には発掘されていないカバやワニ、象なども「遊び心」を交えて創作した。馬場さんは「楽しい雰囲気味わってほしい」と話している。(佐藤清孝)

15日、国立調布の陶芸家個展

埴輪は古墳時代特有の素焼きの焼き物。このうち動物埴輪は、古墳時代の中後期にかけて全国各地で作られ、財力や権力を示した馬形埴輪の出土が多いという。

馬場さんは陶芸家の両親の下で育ち、小学生のころから焼き物に親しんできた。78年に都立神代植物公園の近くで陶芸教室を開く傍ら、多くの公募展にも入選している。動物好きも手伝って、以前から少しずつ動物埴輪を手がけてきた。「埴輪は死者と生者を分ける装飾品だけ、敷しい顔ではなく穏やかな感じを出している。『死』を緩やかに受け止める古代人の死生観にひかれた」という。

埴輪は、陶芸教室で余った土に、黄土(鉄分のある粘土)を混ぜ、シャモット(素焼きを砕いた砂粒)を練り込んで閉れにくくして作る。本来は野焼きだが、馬場さんは電気釜に藁や木炭を入れ、野焼きのよけに焦げ目をつけて雰囲気を出す。

埴輪の個展は今回が初めて。この1年間に作った約40点を展示する。馬や鶏のほか、猫や魚、恐竜などの作品も多い。「もし古墳時代に身の回りにいたら飾ったのでは、と想像しながら創作した。陶芸展というと堅苦しい雰囲気があるけど、気持ちをやわくして子どもやお年寄りも楽しめる展示にしたい」と話している。

JR国立駅南口近くのギャラリー「アトスペース88」(国立市中1丁目)で。

問い合わせは同ギャラリー(042・577・2011)へ。

朝日新聞武蔵野版